

彦坂尚嘉《フロア・イベント》1970年

1946年、東京に生まれた彦坂尚嘉は、1967年に多摩美術大学絵画部油彩科に入学。全国的な学園紛争のさなか、1969年7月に美術家共闘会議（美共闘）の結成に参加。反戦・安保闘争、全共闘・学生運動が敗退していく1970年以降、美共闘は政治闘争から「戦略的後退」をはかり美術の場に転戦、彦坂は理論と実践の中心になっていく。

ポスト70年美共闘の活動の一つが、第一次美共闘 Revolution 委員会がプロデュースした個展シリーズだった「1年間、美術館と画廊を使用せずに、おのおの1回ずつ有料の美術展を開催する」という発想は、反芸術世代が「オフ・ミュージアム」で試みた美術館からの楽観的な離脱を批判し、制度の外の場所に出ながら、なお無意識に立ち現れてくる「内なる美術館」を「発見」するための企画だった。4つ実現した個展のうち、彦坂は自宅での個展を1971年に開催した。

この自宅個展の準備として計画、実行されたのが、最初の《フロア・イベント》、つまり1970年の《フロア・イベント No.1》である。当初「床に白いものを撒きたい」と考え、石膏を畳に撒くことを考えていたが、先輩で東京フルクサスの音楽家、刀根康尚の助言でラテックスに変更する。アンモニアを溶剤とした産業用の石油缶入りを購入。彦坂は全裸で自室八畳間と縁側にラテックスを撒き、友人で作家の小柳幹夫が行為のアシスト、刀根が彦坂の用意したカメラで撮影した。この二人が唯一の目撃者となり、事実上は観客ゼロ。行為の後、畳の上でラテックスが乾いて乳白色から透明になっていく過程を彦坂自身が撮影した。乾燥したラテックスは10日目に床から引き剥がした。

今回出品されているのは、このとき撮影された白黒写真356点から選んで焼いたビンテージプリントの一部である。

注意したいのは、激しいアクションでラテックスを撒き散らすのではなく、淡々と少しずつ撒きながら手箒で丁寧に薄く広げていったこと。絵具やペンキで色面を塗る作業手順に似ていなくもない。また、当初の構想は、同じ行為を翌年の自宅個展として再演するのではなく、この記録写真を展示し、「情報アート」として流通させていくことだった。しかし、朝日を反射してキラキラと光るラテックスの表面を見て「美しい」と思ったのがきっかけで、この経験を共有すべく71年個展でラテックス撒きを再演することになる。この二点は、ミニマル・アートから衝撃的な影響を受けて始めた「絵画解体」の一つの帰結としての《フロア・イベント》にある絵画性の痕跡とでも言えようか。1969年から絵具をまぜたラテックスを床に直に流して「床に落ちた絵画」を制作したアメリカのリンダ・ベングリスとの同時代的響応は興味深い。

一方、床を覆う乳白色のラテックスは畳を隠し、そこに現出するニュートラルな空間は、周囲に置かれた家財道具との齟齬をきたし、日常空間を異化する。これは、ある種の視覚的現象学的括弧入れとなり、「床を見る」ことが「自らの拠って立つ足場を省察する」という認識の場を浮き上がらせる。これが《フロア・イベント》のコンセプトチュアルな意義である。

彦坂作品の全体像を考えると、《フロア・イベント No.1》は、古典音楽という主題として機能し、この後さまざまに変奏されていった。《フロア・イベント》自体は、第一次（1975年で終息）、第二次（1992年からの新展開）と変奏しているが、くわえて床の上の皮膜が木の上の絵具に変奏されると《ウッド・ペインティング》に展開し、「床を見る」という認識行為が変奏されて1972年の《年表》作成に始まり、最近では《皇居美術館空想》や《第6400次元アート・プロマガ》にいたる言説の作業や作品が展開する。

《フロア・イベント》は彦坂のデビュー作品であると同時に、けっして「閉じた円環」にとどまることなく「螺旋運動」を生成しつつ、ものごとの本質を見つめようとする彦坂という作家の原点となっている、と言えるだろう。

（富井玲子 2011年8月23日）

【参考文献】富井玲子「グローバル化の中で戦後日本美術を考える：彦坂尚嘉《フロア・イベント》をケース・スタディーとして」、大阪大学文学研究科西洋美術史研究室編『若山映子先生ご退職記念論文集』（2006年）所収